

編集後記

(56巻 第10号 2010年10月)

昨年縁あって日本VR (Virtual Reality) 医学会の事務局を引き受けており、この9月に第10回の学術総会を京都でお世話させていただいた。この学会は、情報工学などを専攻する工学系の先生と医学研究者が参加する比較的めずらしい学会であるが、国立がん(研究)センター名誉総長の末舛恵一先生が理事長をつとめておられるなど、医学系を中心に運営されてきた。

体腔鏡手術の発展や医療訴訟の増加などの社会的背景を考えると、VRを応用した医師、特に外科医の技術教育や手術支援は将来性のある分野であると認識している。5-6年前には、医学と工学との間には大きな谷間があったが、共同研究なども進み、やっと実践応用出来るようなレベルのプロダクトも出てきている。泌尿器科領域でも、横浜市大、札幌医大、関西医大、兵庫医大から興味深い演題発表があった。

CTなどを使って個人の画像情報を3次元化することは、すでにかかなりの精度で可能になっている。将来の夢は、外力を加えた時の臓器の変形度合いや位置変化、さらには機能などの生体情報を加え、personalized VR bodyを作成することである。

(小川 修)